デザインで切り拓く政策立案

ミラノ工科大学　平成31年入庁

浅野 芳成

国税庁総務課、長野税務署法人課税部門国税調査官、内閣官房副長官補付主査などを経て、令和6年から現職。

ミラノで挑む研究課題

国民、政治家、マスコミ、そして行政機関。政策立案は、あらゆる利害関係者によるコミュニケーションの集合体です。しかし、立場により異なる政策への要望を、サービス構築者たる行政機関が全て把握するのは困難を極めます。そこで、デジタル技術を活用しつつ、デザイナーがプロダクト等を作り上げる際のコミュニケーション手法を政策立案過程にも導入できれば、従来よりも多角的な視点を含んだ行政サービスを構築できると同時に、行政機関の周知広報施策にイノベーションを起こせるのではないか。これが、デザインの都にあるミラノ工科大学でコミュニケーション・デザインを学ぶ私の研究課題です。

行政と学びの交差点から

入庁以来、納税者から官邸担当者に至るまで、行政サービス構築における幅広い関係者と意見を交わす機会に恵まれてきました。特に、直近の所属先であった内閣官房副長官補付では、税務行政に留まらない政府の主要課題と向き合う中で、視野が広がる喜びとともに、関係者間の意見調整に難航して歯がゆさを感じることもありました。このような行政の現場で得た視点を契機として、現在はヨーロッパの若い学生とともに、エコーチェンバー現象を避けて国際関係を学べる教育アプリの提案など、デジタル時代に直面する社会課題の解決に向けて挑戦を続けています。

国税庁には、e-Taxの利便性向上や適切な申告への理解促進など、効果的な周知広報を必要とする課題が山積しています。税務行政と自己研鑽には終わりがありません。コミュニケーション・デザインと政策立案を融合する「政策デザイナー」として、自分の学びを社会に還元できるよう、これからの日本を変えたいと願う皆さんと一緒に邁進していきたいです。

積極性こそが評価される社会で

南カリフォルニア大学　平成31年入庁

矢野 由夏

国税庁企画課、仙台北税務署個人課税部門国税調査官、法務省訴訟局租税訴訟課係長などを経て、令和6年から現職。

授業について

「Taxationを履修してるなんてすごいね。私はそういうの苦手。」南カリフォルニア大学に来てコースメイト達によく言われた言葉です。どうやら税法の複雑さは世界共通らしく、母国で弁護士資格を取得済みの優秀な学生からしても苦手意識があるようです。実際に税法を履修している学生も税法ってなんか難しそうという意識の下、履修を決意した人たちばかりでした。しかし、その分、彼らの学習意欲は凄まじく、教授の話を遮ってでも質問をし、教授もまたそれを歓迎している様子でした。

税法に限らず、多くのクラスで学生が発言する機会が設けられ、これに参加することが当然とされている中、他の学生と比べて拙い英語で発言をすることはかなりの苦痛でした。しかし、徐々にクラス内にも友人ができ、彼らが私の英語の拙さを全く問題としていなかったことに気づいてからは、堂々と発言できるようになり、大人数のクラスの教授にも名前と顔を覚えられるほどになりました。

普段の生活について

海外留学に来たならばまずやるべきことは、異文化交流だと信じています。その機会は、クラス内のディスカッションや授業の合間の雑談など、いくらでも転がっています。ただ、上っ面だけの会話ではなくより交流を深めるには、積極的にそうした機会を作りに行かないといけません。大学には公私共に充実した学生生活を送れるよう様々なサポート制度が設けられており、その一つとして定期的な学生主導のソーシャルアクティビティ（ランチ会やレクリエーション）の機会があります。私はこれらの活動になるべく参加するようにしています。ここで親しくなった学生とクラスの課題について議論したり、自国の法制度や文化について情報交換をすることも多く、かなり有意義な交友関係を広げることができます。

アメリカで培った経験はとても刺激的で、こうした機会を与えてくれた国税庁にはとても感謝しています。国税庁は海外留学希望者への間口がとても広く、学生時代に海外留学経験を積むことができなかった人のみならず、より見聞を広めたい人にとってもありがたい職場だと思っています。

まだ見ぬ皆さんの留学体験談を聞く日を楽しみにしています。

国際的な議論に携わる行政官を目指して

コロンビア大学　令和3年入庁

中本 天望

国税庁調査課、財務省主税局参事官付、渋谷税務署個人課税部門国税調査官を経て、令和6年から現職。

グローバル化における行政

私は、グローバル化する経済において、いかに適正かつ公平な行政を実現するかということに関心があり、国税庁に入庁しました。今は、税の国際的な議論に携わる行政官を目指し、研修制度を活用して、コロンビア大学の国際公共政策大学院に留学しています。

専門性を高める学び

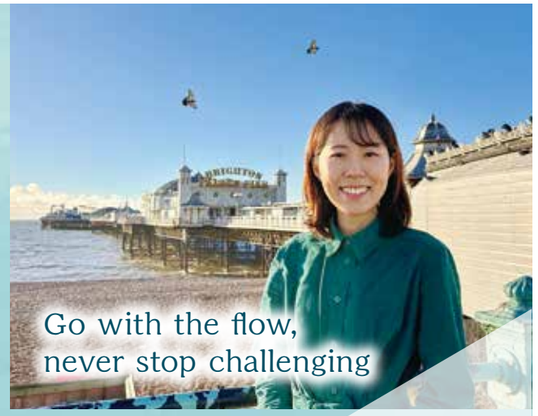
大学院では、経済理論を用いて、誰が税を負担しているのかを分析したり、米国税法の解釈を通じて、その理念や政策意図を理解したりしながら、税の専門性を高めています。また、貿易や金融等に関する実際の事例を題材に、各国政府が十分に政策課題に対処できなかった原因や、利害の対立を乗り越えて国際合意に至った理由などを検討しながら、各国と協力して国際的な課題を解決する方法を学んでいます。

留学で得られる経験

92か国から集まった学生と過ごす時間は、留学したからこそ得られる貴重な経験です。多くの学生は、政府や企業等で勤務した経験があり、必ずしも教科書どおりではない現実を前にして、議論は時に白熱します。また、毎週出される講義の課題を、級友とともに考え、協力しながら解答を導き出すのもよい学びになっています。文化交流も留学の醍醐味です。私も、日本文化を伝えるサークルの一員として、日本酒の魅力を知ってもらう学内イベントの運営に携わっています。思うようにいかなかったり、違いに戸惑ったりすることも少なくありませんが、分かり合えたときの喜びはひとしおです。

国税庁だからできること

留学後は、税の国際ルールに携わることをとおして、適正かつ公平な行政を追求し、社会の持続可能性に貢献したいです。目標とかけ離れた自分の姿に気が遠くなることも多いですが、少しでも近付けるよう、今日も奮闘しています。自らを成長させながら、日本を支える。そんな環境とやりがいが、国税庁にはあります。



Go with the flow, never stop challenging

サセックス大学　平成30年入庁

生田 真実

国税庁総務課、財務省主税局調査課外国調査第二係長、国税庁課税総括課企画係長などを経て、令和6年から現職。

海辺の街ブライトンより

私は現在、イギリスのサセックス大学で刑法を学んでいます。授業では「犯罪」とは何かという理論的基礎から、刑事司法が抱える人種差別問題、さらに国境を越えた金融犯罪について議論しています。クラスで唯一の日本人として、日本の制度を紹介したり、お互いの国が抱える問題についてクラスメイトと意見を交わしています。英語で自分の考えを伝えることは勇気を必要としますが、その努力を支えているのは、行政官として成長したいという強い志です。自分が受験生だったときのように勉強に勤しむ日々を送りながら、学業に集中できる環境に充実感を覚えています。

留学生活では、周囲の人々との関係を築く中で、自分の価値観やアイデンティティを再確認する機会が多くありました。その中で、これまで積み重ねてきた経験を見つめ直す時間を持つことができました。また、新しい環境に適応する中で、問題を自分で解決しなければならない場面が多く、その度に自己解決能力が磨かれていると感じます。こうした経験は、国税庁に戻ってからも役立つと信じています。

自分らしい新たな一歩を

イギリスでの経験の中で、「Go with the flow」という言葉に触れる機会がありました。私は、自分の心の向かう先に意識を向けながら進むことを意味するとも感じました。異文化の中での挑戦や多様な価値観との出会いを通じて、状況を受け入れつつも、自分らしい決断をして進むことの重要性を実感しています。留学生活だけでなく、仕事にも通じるものだと思います。

国内外に広がる多様なフィールドで活躍し、成長する機会を得られるのが国税庁の魅力です。皆さんも、自分らしさを大切にしながら、新たな挑戦の一歩を踏み出してください。国税庁でともに働く日を心待ちにしています。